

# プロティノスの幸福論における観照の位置づけとその意義 —『エネアデス』I 4(46), I 1(53)を中心にして—

伊藤 春美

## はじめに

アリストテレスは、究極的な幸福は神的で人間の水準を超えていると考<sup>①</sup>え、クリュシッポスは、徳を所有するがゆえに幸福と言われる賢者を、自己も含めて誰にも認めなかつたとい<sup>②</sup>う。一方プロティノスは、人々のうちにも幸福はあると主張してい<sup>③</sup>る。プロティノスの賢者は、どのようなあり方で幸福を実現しているのだろうか。このことを理解するためには、彼の観照の捉え方を詳しく調べてみることが重要であると思われる。

本論の目的は、プロティノスの幸福論において、観照が人間の精神活動の中でのどのような位置に置かれているのかを確認し、その意義を考察することである。プロティノスの場合、幸福はあくまでも他者との関係ではなく、一人の人間の心的構造から解明されなければならない。そのため、主要論文「幸福について」(I 4 [46])のほか、「プロティノスの人間観を理解するために「生きものとはなにか、人間とはなにか」(I 1 [53])も併せて考察していきたい。

## 1 幸福論に関するこれまでの議論

古代ギリシア哲学の倫理的問いにおいて、幸福(*eudaimonia*)は常に重要なテーマであつた。快樂、富、健康、名譽そして観照的生活といったものが幸福の候補に挙げられたが、プラトン、アリストテレスの、幸福における観照の高い位置付けは注目すべきであると思われる。

たとえばプラトンでは、『国家』における洞窟の比喩(514A-518B)や『パайдロス』の神々や不死の魂の行進のミユース(246E-248C)、あるいは『饗宴』での、ディオティマの語る、愛の極致で觀る美の描写(210A-212A)も、観照と幸福の深い結びつきを示している。

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』第一〇巻七章で、究極的な幸福は観照的な活動であると述べ、それを「ヌース(知性)の活動」とも言い換えている。さらにそのような活動に從事する生は、神的な生であるとしても、できるだけ不死に与るべく人間は努力すべきであることを主張してい<sup>④</sup>る(117a-b)。

このようなアリストテレスの観照優位の幸福論は、実践を重

視する傾向の近代の倫理学から容認できないものと見なされ、アリストテレス研究者も、問題の箇所の解釈に当たつてはその

「過激な知性主義」<sup>6</sup>を和らげたり、アリストテレスの倫理思想全体から切り離す試みさえなされている。<sup>7</sup>

プロティノスの哲学における倫理的面での解釈にも、同じような流れが見られる。たとえば Gerson は、プロティノスの倫理思想を「アリストテレスとも相容れないし、プラトンのそれさえも凌いでいる著しい過激主義」と述べ、Dillon も、プロティノスに近代の意味での倫理観を求めるものの困難さを指摘している。<sup>8</sup> プロティノスの幸福論をめぐつては、Rist のように、哲学者の幸福は、時間や生成の世界から目覚めることであり、永遠と実在と真の快の世界と一体となることであるという解釈や、Ciapalo のように、賢者の目的は観照を通じて一者と「神秘的な合一」に至ることで、幸福はその前段階の知性の活動だとする研究もあるが、むしろ近年の傾向としては、賢者の、他者や社会に対する関係、賢者の実践的な面をいかにポジティブに解釈するかといふことにも多くの関心が向けられている。

たとえば McGroarty は、幸福は実践的で観照的な徳と知恵の生活の結果であるとみて、プロティノスの賢者に実践的な面での可能性を求めており<sup>9</sup>、Schniewind は、プロティノスの倫理的著作における賢者の重要性に注目して、賢者は人々の模範であるとともに、指導者としての機能を果たしていると考えている。<sup>10</sup> Remes の最近の研究も、観照的生によつて得られた全体の知は、中立的な行為者として世界内における自己の適切な位置と役割を知ることができるとして、観照を優先する賢者が、社会

のうちにあつても有徳な活動に従事できるということを主張している。<sup>11</sup>

しかし以上のような諸研究にあつては、幸福と結び付くといわれる観照が、本質的にどのようなものかという点に関してはほとんど考察されていない。近年のこのような議論の背景には、「過激な知性主義」と見なされる観照の問題を回避しようとする傾向があるのではないかと考えられる。他者との関係をより重要な研究に適合させるという点では、これらの諸研究は新たな可能性を切り拓くもので、非常に有意義な試みであると思われる。しかし賢者の実践面だけにあまりに関心が注がれることは、プロティノスの幸福論そのものの議論とは焦点を異にすることになるのではないだろうか。これまでのところ、プロティノスの幸福論に関して、観照の問題に焦点を当てた詳細な研究は試みられていないようと思われる。

確かに Smith は、賢者の内面の働きに関するかなり踏み込んだ考察を行なっている。彼は、プロティノスの理論には二つの意識の領域が存在すると主張している。つまり経験的意識とそれを超えた知性の段階の意識があつて、これによつて外的な活動と観照活動は共存することができると言っている。彼の考察は、観照に関して興味深い問題を投げかけているが、彼自身「二つの意識のレベルの間には、何も繋がりがなされていない」とも述べて課題を残したままにしている。<sup>12</sup>

二つの意識の問題は、観照が人間の精神活動のどの部分に属するのかという問題とも密接な関係をもつていて。プロティノスの幸福が観照と深い結びつきをもつものだとすれば、観照が

人間の内面の活動のどこに位置付けられるのかを明らかにすることで、彼の幸福論についてもより明確な理解が得られるはずである。しかしその考察に入る前に、ここで述べようとする観照の枠組みをある程度定めておきたい。

### 1 a 幸福論に関連する観照の枠組み

もとより一般に、観照、観想と訳される *θεωρία*, *θέα* は、動詞 *θεωρέω*, *θεάομαι* とともに、「見ること」「見る」が原義で、「視察」や「見物」といった意味も含まれる。

プラトンの場合、特別に専門用語として用いられているわけではなく、普通の意味でも多数使用されている。しかしこの語を幸福と密接にむすびつく概念に導いたのは、プラトンであると考えられる。というのも、先にも述べたように、『国家』『パидロス』『饗宴』といった彼の主要な著作に、哲学の力によつて彼岸の観照に至つた者の、この世界のいかなるものをもつとしてても換え難い幸福なあり方が語られているからである。

そして観照を言わば専門用語化したのはおそらくアリストテレスで、観照を知性の活動とも言い替えながら、この活動が人間の究極目的、神にも似るような人間にとつての最善の生「幸福」に相当するという考察を展開した。

プロティノスによれば、それぞれの生きものの「生」は同音異義的に言われているに過ぎず、本来の完全な生は理性的な生にあるという。この同音異義に係わる用語法は、プロティノスがしばしば用いるもので、そこに含意されているものは実在の階層である。つまり、真実の生としての理性的な生が第一にあり、これが本来「生」と言われるべきものだが、その似姿のような生が感覚的に映し出され、これも便宜上「生」と呼ばれているのである。このことは、「それ以外の生は不完全で生の影 (*ὑδόμητα*)

られているように、万有一切が観照に与えることができるし、さうに彼の形而上学全体に観照を敷衍させることも可能である。彼の観照はこの点で、先行する思想家とは一線を画する際立った独自性を持つといえるが、彼の哲学全体に係わる観照を扱うことはこの小論の枠を越えている。ここでは、幸福な賢者の内面の働きに焦点を当てていきたい。

### 2 賢者の意識と知覚の構造

#### (1) よい生

プロティノスは、「幸福について」の冒頭で、「よく生きることと幸福であることと同じと見なす」という伝統的な見解を俎上に載せ、幸福の議論にはいつていく。この前提を認めるならば、よく生きることは、いかなる生きものにも可能であつて、幸福もすべての生きものに認めなくてはならなくなる。結局彼は、幸福は理性的な生にあると考え、それを人間にだけ認めるストア派の主張におおむね賛意を表しつつも、彼らはその理由を説明することができないと不満を表明する。

プロティノスによれば、それぞれの生きものの「生」は同音異義的に言われているに過ぎず、本来の完全な生は理性的な生にあるという。この同音異義に係わる用語法は、プロティノスがしばしば用いるもので、そこに含意しているものは実在の階層である。つまり、真実の生としての理性的な生が第一にあり、これが本来「生」と言われるべきものだが、その似姿のような生が感覚的に映し出され、これも便宜上「生」と呼ばれているのである。このことは、「それ以外の生は不完全で生の影 (*ὑδόμητα*)

なのである」(3.35) という表現にもよく現れている。したがつて「よく生きる」と言われる場合の「生」もこの真実の生のことであり、その意味で「よく生きること」と「幸福であること」は同じだとプロティノスは考えていると理解できる。この場合、影あるいは写しに当たる生は幸福とは言われないことになる。

このような、真なるもの、いわば実像とその写しという考え方の背景には、プラトンのイデア論が想定されているとみると、これは、プロティノスの基本的立場から考へても異論はないと思われる。つまり、この場合、理性的な生とその写しに当たる生は、イデアとその似姿の関係として捉えられる。したがつて、このようないくつかの対比を受け入れないストア派が考へる「理性的な生」は、プロティノスとは意味内容が異なるついている。

しかし、幸福であるために、イデアに相当するような生が求められないとすれば、それは神的な生にも比されるもので、人間には到達不可能ではないかとも思われるが、プロティノスは4章で、「人間は感覚的な生だけではなく、思考や真の知性ももつてゐるのだから、完全な生をもつてゐる(4.6.8)」と主張する。人々と賢者の違いは、知性を可能的に所有しているか現実的に所有しているかということにあり、現実化させている賢者は完全な生そのものへ移行してしまつてゐるとされる。この移行がどのような意味で言われているのかは、彼の人間のどちら方から見ていく必要があり、それは後の考察で取り上げたい。

プロティノスは、様々な苦しみや悲しみ、運命の打撃などを、偉大な戦士のように撃退する賢者の姿をここで描写している。どのような苦しみの中でも、自分は幸福であると主張することも

は、単なる主観的幸福論と見なされることもありえるだろう。プロティノスの主張する幸福が、そのような主観的観点の問題でないことは、九章で、賢者が病や魔術に冒されて意識がなくても、賢者であるかぎりは幸福である(9.1.7)と述べられている箇所で示される。<sup>17)</sup>

意識がない状態でいかにして幸福が可能かという問題は、プロティノスのこの論文でも、最も難解な部分としてこれまで多くの議論がなされてきた。たしかに、意識についての彼の捉え方を確認することが幸福論理解にとっては重要であると思われるが、これまでの諸研究の関心は、語義の解釈や意識の構造そのものに向けられ、観照との係わりからはあまり吟味されてこなかつた。ここでは、それらの成果を踏まえながらも幸福と観照という視野から見ていきたい。

## (2) 意識

プロティノスは九章で、賢者が賢者である限り意識の有無は彼の幸福に関係しないということを説明するために、健康であると知覚(*αισθάνοντο*)していなくても健康であるし、美しいと知覚していなくても美しい、といった例をあげて、その人の実質にとつて知覚は必須ではないことを示す。

賢者が意識がないという場合に用いられる語は *παρακολουθεῖ* で、この語は本来は「随伴する」といった意味が一般的だが、後に「理解する」や「注意を向ける」といった意味でも用いられるようになり<sup>18)</sup>、特に再帰代名詞が伴うと「自己意識」と訳すこともできる。<sup>19)</sup>

病に冒されて意識がないことと、健康な人が自分の健康を知覚していないことは、異なる事態で、プロティノスは前者に

επαρκολουθέω<sup>21</sup>を、後者に αισθάνομαι という語を配している。知

恵や思慮することが、そのような意識や知覚の後からのものであることと否定して、知恵の実体は滅ぼされることではなく、その活動も眠ることがない (9.17-23) と言われる。

この議論は、眞のわれわれがどこにあるのかという問題にも係わってくるもので、もしわれわれの実質が、意識や知覚にあるのならば、幸福な自己とはその部分にあることになり、意識を失っている時には幸福は否定されることになる。だがプロティノスは、へわれわれ／とは意識や知覚にあるのではなく「思惟する部分の活動 (ἡ τοῦ νοοῦντος ἐνέργεια)」なのである (9.29) と述べ、これは知覚対象のいかなるものからも免れていると主張する。

知覚対象から免れているようなものを、われわれは経験できるのか、そもそもそのようなものを自己と言えるのかといった問題は、経験的な自己の意識がいかにして成り立っているのかというプロティノスの考え方を見なければ理解できない。プロティノスは、知性と知性のもとにいる魂が、知覚や把握の前に活動していることを説明するために、一〇章で鏡面の喻えを用いて次のように説明する。<sup>22</sup>

滑らかで輝いているものが静寂を保つていてるところで、鏡面の反射が起こるように、知性内容 (νοήσις) が戻り (ἀνακάμπτοντος)、魂の生にもとづいて活動しているものが、反対に、いわば押しやられる (ἀπωθέντος) ときに、把握

(αντίληψις) があり、生じると思われる (10.6-10)

ここで知性内容といわれるものは、前文の流れからみて、知性と知性のもとにいる魂（すなわち知性的な魂）の活動内容であり、知性だけに限定されるものではない。

ἀνακάμπτοντος は逆戻りすることで、ちょうど穏やかな水面で光が反射するようなイメージである。この動詞の形は能動相の分詞だが、解釈者によつてはこれを受動的に訳している人もいる。主語が知性内容なのだから、おそらくプロティノスは意図的に能動の形にしていると考えるべきである。というのも、彼の形而上学では、上位のものは下位のものから影響を受けずとどまつており、上位の能力は溢れ出すように下位へ注がれ与えられる<sup>23</sup>。受動的な訳は、光の反射のイメージに影響を受けた理解だと思われるが、「押しやられる」と受動の動詞が使われているのは「魂の生にもとづいて活動するもの」の方である。

つまり、ここでは知性的ものの能動的な力が、静かな鏡面に喻えられるもののうちに届き、そこに知性内容の影像が現れることによって把握が生じる。鏡面とは、能動主体と受動主体の触れ合う場であるということがわかる。そして鏡面が静かな状態になく影像を映し出すことができなくとも、影像の本体はそこで活動し存在しているということを述べた後で、プロティノスは次のように続ける。

魂についても、思考や知性の似姿 (εἰκονίσματα) がそのうちに現れてくる、われわれのうちのそのようなものが静

けさを保つているときには、これらが内に見て取られて (ἐνορᾶται)、知性と思考が活動しているというより先の認識とともに、いわば知覚されるような仕方で認識されるのである (γνωσκεται) (10.12-16)。

「知性と思考が活動して……より先の認識とともに……認識される」という部分の訳は、「より先の認識とともに、知性と思考が活動しているといふことが……認識される」と訳すことも可能だが、その場合「より先の認識」が何を指すのか不明だし、動詞 ἐνορᾶται と γνωσκεται の主語はともに「これら」すなわち「似姿」と考えるほうが自然である。つまり、内に見て取られて、認識されるのは「思考や知性」そのものではなく、その似姿である。そしてこの認識に先行するという意味で「知性と思考が活動している」というより先の認識」が伴っているということになる。

先の引用文で、把握 (ἀπτίληψις) という語がでたが、ここでは認識という語がそれに対応している。Schwyzer は、ἀπτίληψιスをあらゆる種類の把握のための上位概念と考え、<sup>22</sup>知性的な対象だけではなく感覚的な対象をも包含すると見ているが、この文脈では把握は知性対象に向けられていると見るのが妥当である。そして、このような認識を得ることができない事態は次のように説明されている。

身体の調和が乱れたために、これが壊れると、思考や知性は影像なしに (ἄνευ εἰδώλου) 思惟し、そのときには知性活動は表象 (φαντασίας) をもたないのである。したがって人は、

知性活動は表象ではないが、表象を伴つて生じると考えるかもしない (10.17-21)。

先の引用文の似姿 (εἰκονίσματα) および鏡の影像 (εἴδωλον) は、複数と単数の違いはあるが、ほぼ同じ意味で用いられていると考えて問題はないと思われる。

身体の調和の乱れによって壊れるものは、鏡面に喩えられる「魂の生にもどづいて活動しているもの」である。鏡面はなにを意味するのかという解釈については、表象能力 (imagination) に相当するという見方や、中間の魂 (middle soul)、すなわち植物的な能力に係わる下位の魂と上位の知性的魂との中間部分で、普通の意識する人間 (person) に相当するという見方がある。<sup>23</sup>表象の形成される場が中間部分の魂であるとみれば、双方の考えは、ほぼ同様の見方に立つている。これらの解釈は、鏡面の影像を表象と結び付けることによって導かれたものだと思われるが、その場合鏡面の働きには、感覚的な表象能力も含まれるのだろうか。というのも、表象については感覚知覚によつて成り立つという考え方がある。たとえばアリストテレスは、表象は知覚や思考とは異なるが、知覚なしでは生じないし、思考も表象なしでは存在しないと正在している。<sup>24</sup> Armstrong は、プロティノスがここで挙げている表象は、アリストテレス的な意味で用いられていると見ている。<sup>25</sup>

また、身体の調和の乱れが原因となつて、表象が現れないといえば、ここでの表象は知覚に関連した表象ではないかと考えても不思議ではない。ところが、その場合二つの困難な問題が生じ

る。第一は、鏡面の喩えは、他の『エネアデス』の論文の中でも、実体とその似姿の関係を説明するために用いられている。感覺対象に実体的なものを認めないプロティノスが、鏡面を感覺対象の表象能力とみなすとは思われないのである。第一は、意識があって感覺対象の表象が伴っていても、人が知性的な活動を営まないような例は（たとえば I.1.1.1-4 の子供の例など）、この解釈では説明できなくなることである。

このことから、上記引用文で「そのときには知性活動は表象をもたない」と言っている「表象」は、感覺対象に関連する表象ではなく、知性対象に関連する表象と考えるのが妥当である。補足すれば、プロティノスの中期の著作「魂の諸問題について第一篇」(IV 3 [27])にも、魂の表象能力には知性的なものを対象とするものと、感覺的なものを対象とする二種類があり、双方が協和しているときには優れた表象能力が支配して、表象像は一つになつていているけれども、不協和状態になると劣った表象能力も単独で現れる(31.1-13)とある。

以上のことから、鏡面は、われわれの意識の領域というよりも、われわれの魂のうちの、知性対象の似姿を映し出し把握するとのできる部分の比喩とみるほうが適切だと思われる<sup>(27)</sup>。そしてその場合、意識の領域を特定するならば、鏡面より下位にあつて、知性的なものと感覺的なものを対象とする表象能力の活動している、いわば魂の中間部分と考えができるだろう<sup>(28)</sup>。

プロティノスは、その後続けて、意識に対して極めて否定的な見解を表明する。すなわち、われわれが観照や実践の立派な活動、たとえば読書や勇敢な行為をしているとき、「読書をしている」と

か「勇敢な行為をしている」という意識(*παρακληθεῖν*)は必要でないばかりか、かえつて活動を不明瞭にする(10.21-29)と。読書や勇敢な行為の場合、しりぞけられている意識は、すべての意識ではなく、身体的な自己が客体化されたような意識だと思われる。

ここで述べられている例は、九章初めの、賢者は病で意識がなくても幸福である、美しい人は自分が美しいと知覚しなくても美しいという主張と共通するもので、一〇章の鏡面の喩えは、これららの理由を説明するために述べられたものである。ところがこれまで見たように、この喩えは、われわれがいかにして知性対象を把握するか、そしてその把握の前には似姿の本体にあたる知性や思考の活動がすでに存在するということを説明するもので、われわれの経験的な意識にかかるる働き、特に知覚や情動と知性的活動がどのような関係を持っているのかに関しては、詳しい説明は与えられていない。

そこで次に、「幸福について」と同じ後期の著作とされる「生きものとはなにか、人間とはなにか」(I 1 [53])を見ていきたい。この論文は彼の人間觀を見るうえでも、また賢者がなぜ身体的あるいは感覺的なものに一切影響を受けないのかを理解するうえでも有益な觀点を提供してくれている。

### (3) 知覚

「生きものとはなにか、人間とはなにか」では、人間の恐れや悲しみといった情動、思考の誤りや思惑がどうして生じるのか、魂がそのような情動の影響から免れることができかにして成り立つかが検討されている。

プロティノスは、ここで生きもののことを、魂と身体（σῶμα）とからなる合一体（τὸ συναμφότερον, τὸ κοινόν）とする伝統的な見方を引き継ぎつつも、魂の非受動性という彼独自の観点を保持しようとして次のような説を開拓する。すなわち、合一体のうちの魂と言われるものは、眞の魂ではなく、魂から届けられる生の能力とみなす考え方である。このことは、魂の存在論的先行と能力の捉え方から説明される。

すなわち彼は、能力自体と能力にもとづいて活動するものとを区別して、魂は能力自体で能力を与えるものであり、生きものは、この与えられた能力と素材とからなるものと考える。このように区別することによって知覚に係わるもうもろの情動は生きものに属し、魂自体はこれらの人々から影響を受けることがないということが説明される。

魂に由来する能力は、「光のようなもの」(7.4) に喻えられるが、これは「幸福について」の鏡面の比喩のことを思わせる。ただしここでの光の比喩は、知性内容ではなく魂から生きものへ与えられる能力全般を示しており、その伝達方法は、一つの魂が多くの鏡に映るように自分の影像を与える (8.17-18) と言われる。感覚能力や植物的能力など、いくつかの諸能力に応じて喻えも多面鏡になつてゐる。プロティノスは、魂の知覚する能力は感覚対象についての能力だと見る考えを否定して次のように説明する。

魂の知覚する能力は、感覚対象についての能力でなければならぬということではなく、むしろ感覚から生きもの

うちに生じる印影 (τύπων) をとらえる能力でなければならぬ。なぜならそれは、すでに知性対象 (νοητά) である像であり、魂の知覚のほうは実体のうえでより眞実のものであつて、影響を受けない仕方での形相だけの観照である (7.9-14)。

この文脈から、知覚は二種類に区別することが可能である。一方は生きものに生じる外的な知覚といわれるもの、他方は魂の知覚でより眞実のものである。この二つの知覚の間には、なにか大きな飛躍があるようみえる。なぜ生きもののうちに生じる印影が、いきなり知性対象になるのだろうか。

そこで、前章で述べた中間部分の魂の活動を間に入れて考えてみると、その部分は直接知性対象を観ることはできないので、その影像を受け取り、生きものから生じる印影をつきあわせながら表象に係わる活動に従事する。このことは、同時期の論文「認識するものの諸存在とかなたのもの」(V 3[49].2.7-11) にも類似の説明が見られる。

この段階で、知性由來の影像と生きものから生じる印影とが一体となつてゐると考えられる。そして「すでに知性対象である」といわれる段階は、影像ではない次元、いわば鏡面の上位の段階を示している。つまり、生きものから生じる印影は、中間部分の表象能力を媒介として似姿と重なり、さらに上位に当たる知性対象と一体になつてゐることになる。ただし、「すでに」といわれているとおり、この一体化に時間的な経過をみると

できず、むしろ知性対象が先行している。

この構造から考へると、魂の知覚つまり観照を前提としてわれわれは外的な知覚についても可能となつてゐるのだが、知性対象、その似姿、印影が一体化してゐるために、経験的領域では普段このような魂の観照を認識することができず、外的知覚があたかも認識にとつてすべてであるように錯覚するのである。

そして外的な知覚は魂の知覚する能力の影像であるといわれることから、ここには二重の写しの構造を見ることができる。すなわち、能力の写し（魂の知覚の能力とその写しとしての外的知覚）と、能力の対象の写し（知性対象とその写しとしての印影）である。結局、知性対象に対応するような実体的なものが、外界に、つまり印影の背後に存在しないのである。その意味でも、印影といわれるものは本来は知性対象なのである。

以上のことから、「幸福について」九章、一〇章で提起されたいた、賢者と意識の関係を考えてみると、賢者が病で意識がない場合は、外的な知覚の作用が全く伴つておらず、魂の中間部分では意識が生じてはいなければ、魂の観照活動は行われてゐる状態であり、「勇敢な行為をしている人」や「読書に集中する人」の場合は、外的な知覚の印影を表象化する働きよりも、思考や知性の似姿を受け取ることに主要な活動が向けられていると解釈できる。このときの活動は、知性対象との一体化が進んでいる状態ということもできるだろう。

逆に「読書をしている」「美しい」と自己を意識したり知覚する場合は、感覚器官を介するような知覚ではないが、自分自身を外的にいわば知覚して表象化することに活動が向けられている外的な知覚の働きに傾きすぎることによつて知性の似姿をうまく受け取ることができなくて、感覚的な表象にかかわる活動だけで判断した場合に誤った思考が生じると考えられる。これを身体の調和が乱れて鏡面が壊れ、知性の似姿が映らない状態と

状態と考えられる。このような活動が、本来の活動を不明瞭にさせると言われるのも、知性対象との一体化を妨げてゐるからであろう。プロティノスが、賢者の幸福は知覚対象のいかなるものからも免れていると述べるのは、このような外的なものにかかる知覚や意識に影響を受けることである。

ところでこれまで、魂の中間部分に関する表象能力と知覚を中心にしてきたが、思考とはどのような関係をもつてゐるのだろうか。意識の内容では、思考の要素も重要なと思われる。<sup>(29)</sup>そこで次に、思考と観照の問題へ考察を進めていきたい。

### 3 真の思考と観照

「幸福について」では、鏡像の本体に当たるものが「知性や思考(έννοια και γνῶσην)」という表現で説明されていて、思考が、鏡面より上位の眞の魂の活動の側に配されていることは明らかだが、経験的に考えれば、われわれはしばしば誤った思考をする。プロティノスは、そのような思考を偽りの思考と呼び、偽りの思惑と同列において、実際には思考ではなく、表象であつて、魂の思考的部分の判断を待たずに判断しているのだ(I 1.9.4-10)と説明する。<sup>(30)</sup>欲求や激情といった情動も、これら偽りのものに属すと言われる。

前章でみた意識の構造から考へると、表象にかかわる部分が、外的な知覚の働きに傾きすぎることによつて知性の似姿をうまく受け取ることができなくて、感覚的な表象にかかわる活動だけで判断した場合に誤った思考が生じると考えられる。これを身体の調和が乱れて鏡面が壊れ、知性の似姿が映らない状態と

みることもできよう。プロティノスが鏡面の上位に配する思考は、眞の思考と言われる誤らない思考であり、賢者の幸福もこの上方部分にあると考えられる。プロティノスは眞の思考について次のように述べている。

少なくともそれが本来的な仕方で眞実の魂に属する思考であるならば、思考が知覚の印影の判断をするときには、すでに形相を観照しているのであり、またいわば自己意識 (*οὐν συναίσθησι*) によって観照しているのである。(I 1.9.18-21)。

ここでの自己意識 *συναίσθησις* は、先の *παρακολουθέω* に相当するような外的な知覚を伴う意識とは異なり、純粹に魂の思考の自己意識で、経験的な意識を超えた概念に向けられている。<sup>(31)</sup> Smith が、賢者に「一重の意識」の存在を考えているのも、このようないい意識に注目した結果である。<sup>(32)</sup> が用いられているのは、知性本来の自己知、すなわち主体と客体が完全に一致する自己知と類比させていていると考えられる。プロティノスの形而上学では、上位に行くほど主客一体化の傾向が強まるが、魂の観照の段階は、知性本来の自己知にもなぞらえられる自己意識を持つのである。思考についてのここでの記述は、前章の「知覚から生きものの中に生じる印影はすでに知性対象である」という文と対応する内容を示している。そのときの文脈では、知覚が働いているときには魂の観照が先行していると理解できたが、ここでは「すでに形相を観照している」と言われることから、思考に対しても観

照が先行していると解釈することができる。

しかし、眞の思考と観照の活動の関係はもう少し考えてみなければならない。というのも眞の思考も鏡面の上位で働いているのだから、観照の活動が先行するというよりも、両者は同一ではないかという可能性もあるからである。

プロティノスが「観照する」という語を用いるときには、その観照対象は「形相」といわれる。この形相が、単なる感覚的なものから抽象化された形のようなものを指示していないことは、前章でみたとおり、それが「知性対象 (*νοητά*)」と言われることや、観照の先行性から確認できる。つまりこの形相は、魂の上位の知性由来のものである。

このように観照の活動は、常に知性対象へ向けられている。一方思考は、判断に係る活動に従事している。おそらくこの両者は、知性的な魂における機能の相違ではないかと考えられる。

プロティノスは「認識する諸存在とかなたのものについて」四章で、自己を認識するものに二種類あると述べる。ひとつは魂の思考の本性を認識するもので、いまひとつはこれより上位で、自分自身が知性となることによつて、知性にもどづいて自己を認識するものである。そして、後者の場合、人間とは全く別のものとなつて、自己を上方へ運び去り、ただ魂の優れた部分だけを引きさらつて思惟する。この部分だけが、知性活動への翼をはやすことができるのだ (V 3.4.7-14) と言われる。

前者は魂が思考のレベルで認識する段階で、後者は魂ではなく、知性の自己認識だとみるべきかもしれない。しかし、「自分自身が知性になる」という表現から考えると、まだ知性に

なつていいものが、これから知性になるところだとも考えられる。またそれが、知性そのものだとすれば「知性にもとづいて (κατὰ τὸν νοῦν)」という表現もでてこないはずである。そ

うだとすると、これもやはりまだ魂の段階にあるもので、しかも思考レベルの魂よりも上位にある魂である。もつとも、プロティノスは三章で、これを魂の部分と呼ぶべきだらうかと自問して、むしろ「われわれの知性と呼ぶだらう」(3.22-27)と言っている。この段階は、知性と魂のまさに分水嶺にあたるところであろう。

ところで、自己認識と観照は異なるのではないかという反論が予想されるが、プロティノスは五章において、観照と自己認識をほとんど区別することなく用いている。観照とは、究極的には、自分が自己であるところのもの、つまり自己の根源の認識であろう。知性は最も純粹な仕方で自己認識する。したがって、知性的魂のうちで、常に知性に直接触れ、まさに知性となつて自己認識することのできるものこそが観照する魂である。知性になつたという次元ではすでに知性であるが、知性になるという次元ではまだ魂であるようだ。そうすると、観照する魂こそが、知性への翼をはやすことができるところであり、もしわれわれが知性への上昇を願うならば、ここにこそその突破口があるということになる。

一般的に「知性的な魂」と言われるときには、観照と思考の働きを包含するひとつの魂として捉えることができるけれども、思考は相対的に外部に向けられた活動であり観照によって支えられている。いわば思考にとつて観照は、知性の把握を可能にさ

せる自己自身の鏡面のようなものかもしれない。しかし観照の方は、すでに直接観てているのである。

以上のことを踏まえて、改めてプロティノスの「知覚から生きもののうちに生じる印影はすでに知性対象である」や「思考が知性の印影の判断をするときにはすでに形相を観照している」で述べられている「すでに (πλει)」という語に注目してみると、この語は時間的な遡及を許さない関係を含意しているのではないかだろうか。Smith は、上位の活動と経験的なレベルでの活動を「同時に (simultaneously)」という語で示<sup>(33)</sup>し、ほかの研究者のうちでもそのような記述をしている人も多いが、厳密にいえば、両者の関係に同時という時間的な表記はふさわしくないだろう。

つまりこれは、「同時」や「先」という時間的な概念によつて把握されるものではなく、「内」と「外」という空間的表現さえふさわしくなく、時空間を超越しながらもわれわれの内奥に常に現前し、光のように内面を照らしている永遠的なある相の存在を指示しているのである。外的な知覚や知覚を伴う意識は観照と二相をなし、思考と観照も二相をなし——ただし場所的な意味ではないが——これら内面の諸活動すべては観照する魂へ収斂されていると考えることができる。

このように見てくるとき、プロティノスが、人はだれでも思考や真の知性をもつてゐるのだから、完全な生を持つてゐる (I 4.4.6-8) と語るその意味が理解される。賢者は、人々が所有していながら気付かないでいる、このような魂の観照している相に気付き、そちらに自己を移してしまつてゐる人と言えるだらう。

またこれを、魂が似姿に頼らずに現に知性として活動するという意味での現実活動とすることもできるかもしない。

#### 4 賢者の幸福と観照

以上の考察によつて、プロティノスの観照が人間の内面のどのような位置にあり、どのような働きをしているのかを見ることができた。そこでこの観照が、賢者の幸福とどのように結び付いているのかを最後に見ていただきたい。

プロティノスは、本来のわれわれとは知性的な活動をする魂、つまり真の魂にあると主張し、生きものと本来の自己とを区別していた。それは、賢者の場合は、苦しんでいるものと、それと同居しているものとは別で、苦しんでいるものとともにいるのが必然である間も、常に善の観照をやめることがない(1.4.13.10-12)と言わることからも理解できる。

ここでは、観照がなぜ賢者にとつて幸福と結び付くのかについて、次の二つの点を指摘したい。まず第一は、自己を、観照する魂という別の相へ移すことによって苦しみを受け入れないとある、ということもできるかもしれない。もつとも、それはネガティブな要素にすぎないだろう。この点にとどまるならば、エピクロス派のアタラクシアとそれほど異なるところはないかもしない。それに、苦しみから逃れ得るならば幸福な生ではない。幸福はむしろポジティブな要素によって測られるべきだろう。

第二は、観照する魂へ自己を移すことは、眞の自己への回帰を

意味するということである。観照の活動が眞の自己へ回帰する契機であれば、これに優る幸福への道筋はないと思われる。自己が自己である状態こそ、プロティノスが幸福なあり方として語る「充足した生」と言えるだろう。しかしそうであるとしても、とりわけ観照という面に焦点を当てるならば、「観ること」と幸福にはより重要な因果関係が存在するはずである。

第三は、観照対象が幸福をめざすものにとつて十分価値あるものであるということである。プロティノスは「幸福について」の最終章で、このことだけを目的とするようとに読者に注意を促し、プラトンの言説として、「知恵のある幸福な人になろうとするものは、あの上方の世界から善きものをとり、これを眺め、これと似たものとなり、これに従つて生きなければならない(1.6.10-13)」と語る。

プロティノスが念頭においているプラトンの箇所を特定することはできないが、少なくともこれこそが、プロティノスがプラトンから汲み取っている幸福な生のあり方である。

類似する言説を求めて要約すると、たとえば『パайдロス』では、天球の外の世界をめぐる神々の魂は、もちろんの眞なるものを見渡し、それによつてはぐくまれ、幸福を感じるが、また他の魂たちも神につき従い倣うものは眞実在を観照することができ(247C-248A)とある。また『饗宴』では、感覚的な美を手掛かりに学びの道を上昇して行くとき、突如驚嘆すべき美の本性を見て取ると言われ、その美は永遠的に存在し、生成消滅するこどもないもので、人間にとつてどこかに生きる価値があるとすれば、この美そのものを観照することにこそあると言われる。そ

してこの美を眺め、それとともにいるとき、眞の徳を生み、それゆえ神に愛される者となつて不死の者になる(210C-212A)と述べられている。<sup>(24)</sup>

観照の先に見えるものについて、プロティノスがこのようないラトーンの言説を心に抱いていたということは十分に可能である。それでもれば、プロティノスにとって観照とは、このような人間の個体性を超える大いなるもの、ラトーンも語るような永遠的で究極的な美へ差し向けられたものと言つことができるだろう。そのとき観照は賢者にとって目的ではなく、眞の目的は観照によって観ることのできる対象であり、その対象に似たものとなり、それとともに生きるこゝである。このよつにして観照は、眞の幸福実現のための有力な手段とみなすことができるのである。

## おわりに

以上の考察から、プロティノスの幸福論における観照は、実践か観照かといふ「二者択」のもとにふくらひれるよつた性質のものではなく、人間のあらゆる内面の諸活動を可能にするものだ、観照そのものはそれいと相を異にしつつ常に現前する活動であり、賢者はその相「自」を移すこゝにて、本来の自「自」へ回帰し、眞の幸福を実現している人であるこゝを示すこゝができるのではないだろうか。

一般に、身体的なものに根ざした無意識や潜在意識についてよく言われるけれども、プロティノスの語る観照が、そのようなものとどれほど異なるものであるのかふくらむにわれわれ

は気付かされぬ。このいふは、観照の上める永遠的な相の意味を考究することによつてやむに明確になつてしまふが想われるが、それは今後の課題としていたい。

### 【証】

本論は、第一四回新ラトーン主義協会大会(1900七年九月、於神戸市外国语大学)において発表したものに加筆修正をしたものである。発表や大会での交流に際し、貴重なご意見、ご助言を賜つた先生方に感謝申し上げたい。

### 【証】

(1) アリストテレス『ニコマコス倫理学』1177b26-27°

(2) SVF III 662.

(3) Enneades, I 4.4.4-5.

(4) テキストは Plotini Opera, editio minor, 3vols, P. Henry and H.-R. Schwyzer ed., Oxford, Oxford University Press, 1964-1982 を用いた。翻訳は主に以下を参照した。A. H. Armstrong, Plotinus, I, Cambridge, Harvard University Press, 1966; E. Harder, Plotins Schriften, Va, Hamburg, Felix Meiner, 1960. 田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦共訳『プロトティノス全集』第一巻、中央公論社、一九八六。  
(5) J. M. Rist, Plotinus: The Road to Reality, Cambridge, Cambridge University Press, 1967, 139.

- (φ) A. Kenny, *Aristotle on the Perfect Life*, Oxford, Oxford University Press, 1992, 92.
- (♩) ハニバトムスの辯論論文を「アリストテレスの倫理」に「アリストテレスの倫理」に J. M. Cooper, *Reason and Human Good in Aristotle*, Indianapolis, Hackett Publishing Co. 1986; J. L. Ackrill, Aristotle on Eudaimonia, A. O. Rorty ed., *Essays on Aristotle's Ethics*, University of California Press, 1980, 15-33; R. Heinaman, Eudaimonia and Self-Sufficiency in the *Nicomachean Ethics*, *Phronesis*, 33-1, 1988, 31-53; D. Keyt, Intellectualism in Aristotle, J. P. Anton and A. Preus ed., *Essays in Ancient Greek Philosophy* IV, Albany, State University of New York Press, 1991, 364-387; A. W. H. Adkins, *Theoria* versus *Praxis* in the *Nicomachean Ethics* and the *Republic*, *Classical Philology*, University of Chicago Press, 73, 1978, 297-313.
- (∞) L. P. Gerson, *Plotinus*, London/New York, Routledge, 1994, 189.
- (σ) J. M. Dillon, An Ethic for the Late Antique Sage, L. P. Gerson ed., *The Cambridge Companion to Plotinus*, Cambridge, Cambridge University Press, 1996, 315-335.
- (Ω) Rist, *op. cit.*, 152.
- (ι) R. T. Cipalo, The Relation of Plotinian *Eudaimonia* to the Life of the Serious Man in Treatise I.4(46), *American Catholic Philosophical Quarterly*, 71-3, 1997, 489-498.
- (Ω) K. McGroarty, Plotinus on Eudaimonia, K. McGroarty ed., *Neoplatonica: Studies in the Neoplatonic Tradition*, Hermathena 157, 1994, 103-115.
- (ι) A. Schniewind, *L'Ethique du Sage chez Plotin, le Paradigme du Spoudaios*, Paris, J. Vrin, 2003; The Social Concern of the Plotinian Sage, A. Smith ed., *The Philosopher and Society in Late Antiquity*, Swansea, the Classical Press of Wales, 2005, 51-64.
- (Ω) P. Remes, Plotinus's Ethics of Disinterested Interest, *Journal of the History of Philosophy*, 44, 2006, 1-23.
- (ι) A. Smith, Unconsciousness and Quasiconsciousness in Plotinus, *Phronesis*, 23-3, 1978, 292-301; The Significance of Practical Ethics for Plotinus, John J. Cleary ed., *Traditions of Platonism*, Ashgate, 1999, 227-236.
- (ι) A. Smith, Action and Contemplation in Plotinus, A. Smith ed., *The Philosopher and Society in Late Antiquity*, Swansea, The Classical Press of Wales, 2005, 71.
- (Ω) ハニバトムスの辯論論文を「アリストテレスの倫理」に「アリストテレスの倫理」に H. R. Schwyzer, Bewusst und Unbewusst bei Plotin, *Les Sources de Plotin*, Entretiens sur l'Antiquité Classique 5, Vandoeuvres-Genève, 1960, 369.
- (Ω) E. W. Warren, Consciousness in Plotinus, *Phronesis*, 9-2, 『新プラトン主義研究』第8号 70

- (20) ノの譬えのイメージは、鏡がつぶやよりも水面で、プロティノスも水面の反射を考へていたと想われる。訳も本義に近づかず、鏡ではなく鏡面である。
- (21) *Enneades*, III 8.10.1-19, V 1.6.28-49, V 3.12.39-44 など
- (22) を参照。
- (23) Schwyzer, *op. cit.*, 367. Warren & McGroarty は表象能力に關係する概念として「感覚的な領域」と「知的な領域」の両方向に適用されるべきだ。二者は一致している。
- (24) McGroarty, *Plotinus on Eudaimonia: A commentary on Ennead I.4*, Oxford, Oxford University Press, 2006, 148; Warren, *op. cit.*, 84.
- (25) Smith, *Unconsciousness and Quasiconsciousness in Plotinus*, 295; McGroarty, *op. cit.*, 155; H. J. Blumenthal, *Plotinus' Psychology: His Doctrines of the Embodied Soul*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1971, 88.
- (26) H. S. Schibli, *Apprehending Our Happiness: Antilepsis and the Middle Soul in Plotinus*, *Ennead I.4.10, Phronesis*, 34-2, 1989, 214-215.
- (27) ブラックル『死・生』427b14-16°
- (28) Armstrong, *op. cit.*, 200.
- (29) Schniewind は、鏡面の静かな状態と壊された状態に、賢者ノスに一般的の人々との区別をみてくる。鏡面が知性を映す事から部分があざやか興味深い解釈である。Schniewind, *L'Ethique du Sage chez Plotin*, 158.
- (30) プロティノスの魂の区分説についてば、首尾一貫した厳密な区分を求めるのは困難で、むしろ連続体としてみるとが好まれている。Schibli, *op. cit.*, note 14, 210.
- (31) 意識の領域では記憶も重要な要素だが、ここで取り上げるにはできない。記憶に関する「魂の諸問題について」第一篇(IV 3.25-32)に詳しく述べがある。Blumenthal の研究が有益である。Blumenthal, *op. cit.*, 80-99.
- (32) Blumenthal は、思考に関連する語 (*διάνοια* と *λογισμός* あるいは *λόγος*)  $\tauὸ\ διανοητικὸν$  と *τὸ\ λογιζόμενον* あるいは *λογιστικόν*) をプロティノスが区別をつけて用いているのか検討している。それによると、文脈によって多少の違いはあるものの、いわゆる「アリエーション」で用いられてくる「アリエーション」。上位の思考と下位の思考に用語上の区別があるかといふ点にも、I 1 の場合には「真の」アリエーションの差別化がなされてるので問題はなさない。
- (33) Blumenthal, *op. cit.*, 100-103.
- (34) Dodds は *συναίσθησις* と *παρακολούθησις* を回遊すべきの區別意識 (self-consciousness) と眞の眞の口舌言葉における重要性を述べてゐるが、これは適切ではなかろう。E. R. Dodds, *The Ancient Concept of Progress and other Essays on Greek Literature and Belief*, Oxford, Oxford University Press, 1973, 136.
- (35) ただし Smith は *οἶον συναίσθησις* を知性の「グル」だけではなく世界魂の「グル」にも適用せらるべきだ。Smith, *op. cit.*, 296-298. また Warren, Schwyzer もスムア派の共感の

の関連を指摘す。Warren, *op. cit.*, 91; Schwyzer, *op. cit.*, 357.

- (33) Smith, The Significance of Practical Ethics for Plotinus, 235.

(34) Armstrong は、アリストテレスの『政治論』212A1、『ニトニヤトルス』176B1 や、Henry/Schwyzer は、『国家』426D5-6 を加えてね、また Beutler/Theiler は、『アリストテレス』の回帰分の『國家』427D5, 365B1 をもとに挙げて、これで、アリストテレスが、政治論の構成を示す。Armstrong, *op. cit.*, 211; Henry and Schwyzer, *Plotini Opera*, I, 86; R. Beutler und W. Theiler, *Plotins Schriften, Anmerkungen zu den Schriften 46-54*, V b, Hamburg, Felix Meiner, 1960, 329.